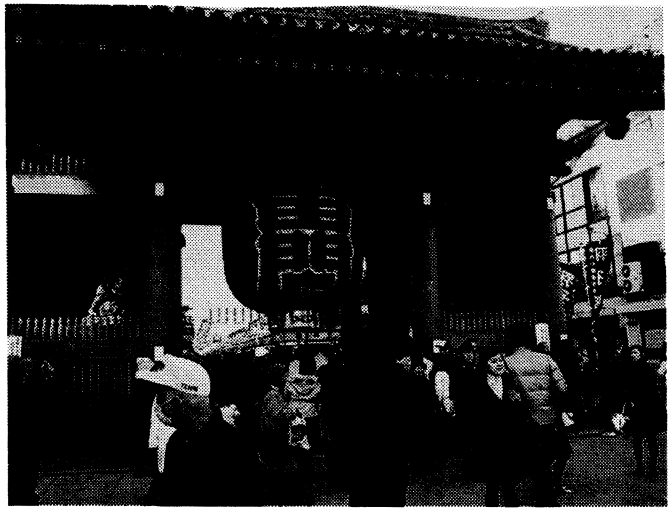
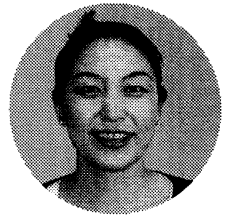
異文化と心通わせ ⑮

村田　佳子



「偽」と私の「偽」



今年も残すところ1週間となりました。年始の記事に「年末にはいい年だっけの～、とご家族で笑えますようお祈りいたします」と記しました。これを読んでくださっている皆さん、あれから12カ月、あっという間でしたがどんな一年でしたでしょうか。

先日浅草の仲見世通りを歩きながら心地よい気持ちになりました。東京はこの時期、まぶしいくらいのイルミネーションがそこかしこに輝いていますが浅草にはその気配さえなかったのです。電気の明るさではなく人の活気、それも新年を心待ちにしているような人々の明るさでした。

恒例の羽子板市の準備にとりかかっていた仲見世通りを歩きながら慣れた様子で露店を組み立てる粋なおじさんたちをみて「和」を感じホッとしたのです。浅草には団体の外国人観光客も多いのですがそんな日本ならではの雰囲気に魅了されたのか一人で写真を撮っている外国人もたくさんいました。

―震・食・倒・毒・末・金・戦・帰・虎・災・愛・命・偽―京都・清水寺で行われている漢字一文字で今年を表す恒例行事。京都にある漢字検定協会が1995年に始めたものだそうですが、1995年の「震」という文字から追っていくだけでもそれぞれの一年を少し想像できます。漢字という文化があり国全体の識字率が高く、多くの人がそれを理解できる国ならではの企画でしょう。

今年の漢字は「偽」。ジャパンタイムズ（英字新聞）ではなんと訳されているのだろうと思って見てみたら「Fake」でした。動詞では「ねつ造する」「だます」という意味です。今回「偽」以外では「食」や「疑」という漢字が上位だったと聞きます。食品偽装問題や健康情報番組でのうその内容が話題になりましたが、これらは今年新たに何かを「ねつ造した」「だました」というのではなくいつからかずっとやっていた「偽」が明かされたということで、私はこれまであらためて気にしなかった消費者、視聴者が自分の口に入るものや自分の耳に入ってくる情報を選ぶようになった年だったのではないかと考えます。

歌手の矢野顕子さんの歌にYou are what you eat（食べたものはあなたになる）という曲がありますが、まさに自分が口にするものは自分をつくっていく、耳にする情報も自分を形成する要素であると気づいて一度考えてみるようになった年だったのではないでしょうか。信じていたものを疑わなくてはいけなくなった、ズルいことが行われていること自体不快です。しかしながらこう書いている私にも「ズル」「ごまかし」をした苦い経験があります。

小学2年から高校まで公文式という学習教室で算数・数学を習っていました。一斉に講義を聴く塾ではなく学校帰りに教室に寄り、自分のペースで課題に取り組み、自宅でも宿題をするもので個人のペースや時間を大事にしながら小さな達成感を味わえる勉強方法だったので習慣になっていました。

そんな中、小学4年のころ、苦手なところにさしかかった時期でした。宿題が嫌で家の机の引き出しに大量に隠していたのです。そしてやったことにして先生にもうそをつきました。最低な子供です。ところが2学期も終わる、ちょうど今ごろの時期、普段どおり学校から帰り自分の部屋に行くとその隠していた宿題がドンと机の上においてありました。サァーと全身の血の気が引く思いでした。母は何も言いませんでした。だからかえって怖かった。まもなく父が帰ってきて事情を知り、何も言わず父の手が私の顔に飛んで私がふっ飛んだのを覚えています。宿題をやらなかったことではなく「やったことにした」、「ズルした」ことに父はひどく怒りました。「ズル」することは人間が一番やってはいけないことだと何度も何度も言われました。私は10代、生意気で両親にはたくさんしかられましたがあんなに怒られたのは後にも先にもありません。

その後、宿題を全部持って先生におわびに行き、泣きべそをかきながらコタツで毎日宿題に向かいました。毎年、クリスマスイブにきていたサンタクロースは当然ながらその年は来ませんでした。最低な私の「偽」です。でもあのまま「ズル」をしてもなんとかなるという道を歩まなくてよかったです。「ズルしてもOK」な環境に常に逃げていたら真っすぐ人と向き合うことができなかったでしょう。それが大人になると自分のズルは人を裏切ったり、絶望させたりしていたことでしょう。あのとき父は手が痛かったはずです。ぶっ飛ばしてもらって感謝しています。

さて、「今年を振り返って漢字で一文字」ではなく「来年どんな年にしたいか漢字一文字でどうぞ！」と言われたら皆さんはなんと書くでしょうか。それでは皆さま、よいお年をお迎えください。

暮れの浅草は人々の活気で満ちていました

（鶴岡市出身、コーチングシステムズ）